

Ⅲ 遺 物

1. 土 器

土器は、井戸、溝、土壙、掘立柱穴等の遺構のほか、それらの遺構を覆う整地土層や水田床土等からも出土し、整理箱で約30杯分ある。

奈良時代の土師器・須恵器を主体とし、他に平安時代の土器あるいは古墳時代の土器・埴輪などが少量ある。土器の記述は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』に準拠する。

遺構出土の土器

SE2600

井戸SE2600の土器は大きく井戸枠内と井戸掘形内の土器に分かれる。

井戸掘形の土器

土師器と須恵器若干が出土している。小片が多く図示出来るものは少ない。

土師器では甕、須恵器では皿B（9）・甕B・壺がある。掘形の土器で特に注目されるのはSK2596出土土器と同一個体に属する須恵器甕片が含まれていることであって、後に記すように遺構の年代、特に井戸の掘削年代を推定する重要な手掛りとなった。

井戸枠内部の土器

井戸枠内部の土層(図5)は埋没の状況によって大きく4層に分けられる。井戸底面のバラス敷きを最下層として順次下層(灰色粘土2・灰色砂)・中層(灰色粘土1)・上層(暗褐土・茶褐土・黒褐土)とする。中層以上は井戸の機能が失われた時期以降の堆積である。井戸は機能を失ったのちも窪みとして残り、完全に埋没したのは上層の時期であった。

最下層：井戸底面のバラス敷きにまじって土師器、須恵器が少量ある。土師器では碗、須恵器では杯B、同蓋等の器形が知られるもののいずれも小片で、図示しうるものは無い。

下 層：土師器では杯A・碗E・甕(12)、須恵器では杯A・杯B・皿B・甕がある。土師器杯Aは(1)、(3)がb₀手法、(2)がa₀手法。暗文を持つものはない。(3)はほぼ完形。(2)はⅠ群土器。(1)、(3)はⅡ群土器とみられる。これらの土器は平城宮土器Ⅳに近い。碗E(6)は完形で、砂を含む荒い胎土である(註1)。須恵器杯A(5)は底部外面ヘラキリの後ロクロケズリする。火ダスキをもつ。Ⅱ群土器。杯B(8・10・11)および皿B(9)はⅠ群土器で、底部にはヘラキリ痕と瓜状圧痕を有する。甕には体部外面に格子目叩きを残すものがある(13)。

中 層：井戸の廃絶あるいは廃棄にともなって形成された層である。

ただしこの段階にはまだ井戸は完全には埋没しておらず窪みになって残っている。土師器皿A(4)がある。放射1段暗文をもつ。雲母を含む荒い胎土である。平城宮土器Ⅲに属す。混入品であろう。

上 層：土師器杯A・甕Aと須恵器杯Bがある。土師器杯A(7)は小型薄手の杯で内面及び外面上端を狭くヨコナデ(e手法)する特徴的なもの。他にこれとほぼ同一の特徴を持つ個体が

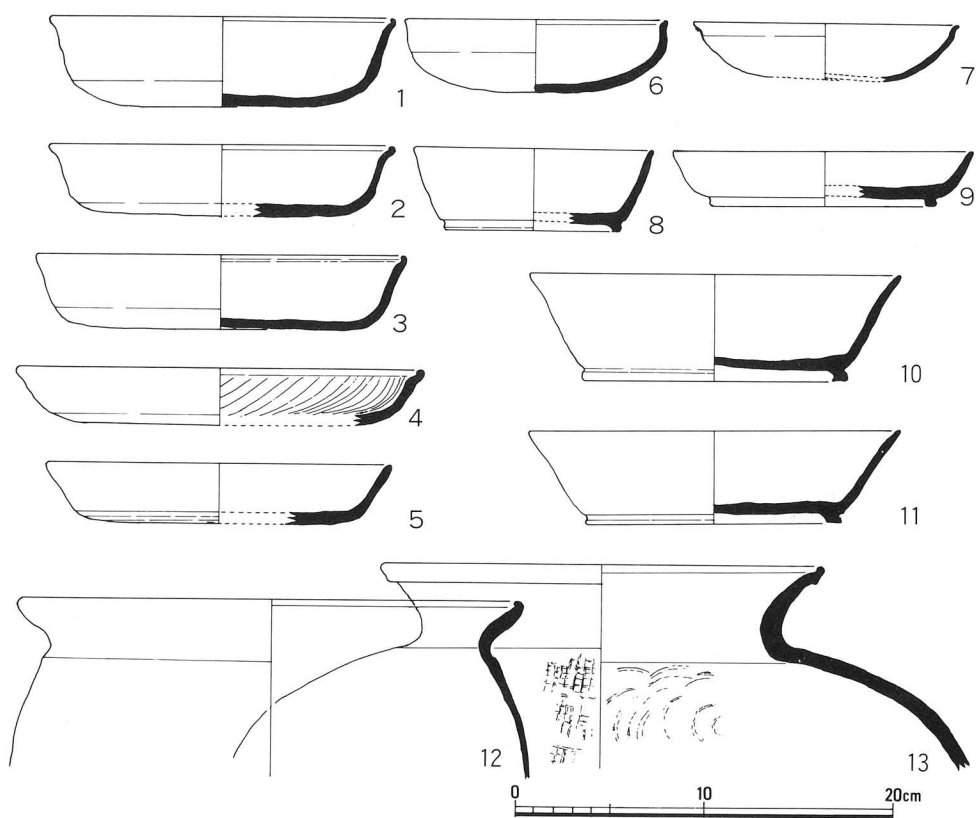


図15 SE2600出土土器

あり、それには口縁部内面に付着した煤が残り、灯火器としての使用がうかがえる。10世紀前半に位置づけられる。

以上の土器はほとんどが断片となっているが、そのなかで、奈良時代の土師器碗E(6)、杯A(1～3)そして平安時代の杯A(7)のごとく、完形または完形に近い土器の存在が目玉される。前者は井戸としての使用の下限を、後者は最終的な埋没の時期をそれぞれ示すものである。

土壌出土の土器

SK2591

土師器杯A・皿A・高杯・小壺・甕・須恵器杯B・杯蓋・杯C・皿B・水瓶・壺・壺蓋等があり、それに埴輪がある。土師器は小破片で図示できない。須恵器杯B(18)はⅠ群土器。須恵器杯C(14～16)は土師器杯Aを模倣した形態で、口唇部内面に沈線をめぐらす。いずれもⅡ群土器。(14～16)・(18)は火ダスキをとどめる。杯蓋には環状つまみをもち、内面に返りをめぐらす特異な形態を持つもの(17)があり、丁寧なヘラミガキで器面を平滑に仕上げる。本遺跡の須恵器の大部分を焼成したと考えられる大阪府陶邑古窯址群には例が知られておらず、三重県斎王宮から類例が出土している。水瓶(19)は細頸の金属器水瓶の形態を忠実に写したもので、整地層

からも同様の器形が出土している(60)。これらの土器は平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属する。

SK2596

須恵器が多く、杯A(38～41)・杯B・杯B蓋(27～36)・皿A・皿B(44・45)・鉢A・高杯・水瓶・甕・壺蓋(42)等の器種がある。口径約60cmの須恵器大甕が出土しており、破片が所所に散在する。SE2600掘形にも同一個体に属する破片がある。須恵器杯蓋の点数が多いのに対して須恵器杯Bが非常に少ない。土師器は杯A・杯B・蓋・甕等の器種があるが細片のため図示できない。(29)はロクロケズリが口縁部下半部までおよぶ。(44)は口縁部内面及び口縁部外面下半部を丁寧なヘラミガキで平滑にする。須恵器ではⅠ群土器、Ⅱ群土器のいずれにも属さない畿外の産地かと推定される土器の存在が認められる(27・29・30・33ほか)。杯B・杯B蓋に顕著であり、高杯にもある。手法的には、蓋の場合必ずロクロケズリし、胎土に砂を含み、硬質の焼成で蓋の類はすべて上面に灰をかぶる等の特徴がある。中には自然釉が掛かるものもある(30)。(38)は底部ヘラキリのままで、(39～41)は底部外面ヘラキリのあとロクロケズリする。(40)は口縁部外面に降灰がみられる。須恵器でロクロの回転方向は(34)・(35)が左まわり、ほかはすべて右まわりである。(32)・(36～39)・(42)・(45)はⅠ群土器。(44)はⅡ群土器。これらの土器は平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属す。

SK2597

土師器・須恵器が出土した。すべて細片で図示できるものはない。土師器には皿A、碗、甕がある。皿Aには灯火器に用いたものがある。須恵器には杯A・杯B蓋・皿Aのほか壺または甕の破片がある。以上の土器は平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属す。

SK2613

土師器に杯A・杯B・高杯、小型壺(21)、須恵器には片口をもつ甕があり、他に埴輪がある。土師器杯Aは2段放射暗文をもつ。小片で図示できない。土師器皿A(20)は小型品である。杯Bは外傾する低い高台を持つ。高杯は杯部に2段放射暗文をつける。須恵器は杯Bが3個体ある(22～24)。口縁部内外面にはロクロによる凹凸が著しい。外傾きの低い高台を有する。いずれも焼成は脆く軟質で、Ⅰ群土器とみられる。これらの土器は平城宮土器Ⅰに属す。

柱穴出土の土器

柱穴からも土器が出土している。すべて小片で量もすくない。年代的には、漠然と奈良時代とわかるものの、それ以上詳細な年代を決定できる土器は多くない。

SA2608

この堀の柱穴から土師器・須恵器・埴輪が出土した。器形の判明するものには須恵器の杯B・杯蓋・杯Cがある。須恵器杯蓋(25)は頂部が高く、ロクロケズリする。平城宮土器Ⅱ以降に属す。

SB2610

この建物の柱穴から円筒埴輪が出土している。

SB2580

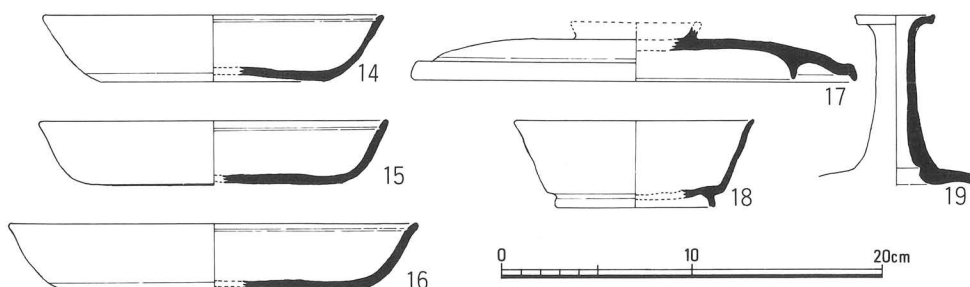


図16 SK2591出土土器

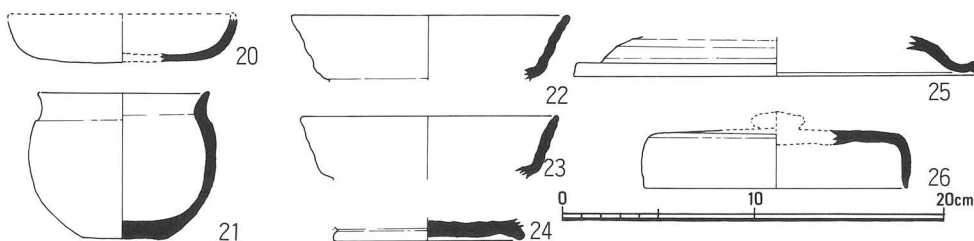


図17 SK2613・SB2585・SA2608出土土器

掘形8ヶ所から土器が出土している。わずかに土師器杯と須恵器蓋に8世紀前半とわかるものがある。

SB2585

掘形3ヶ所から土器が出土している。土師器皿A・皿B・甕、須恵器に杯A・壺蓋がある。須恵器壺蓋(26)はⅡ群土器。

溝出土の土器

平城京以前のSD2593・SD2594から円筒埴輪片と布留式の土師器が出土している。SD2580に重複する南北溝から、返りをもつ7世紀後半の須恵器蓋が出土している。

整地土・包含層出土の土器

遺構の上面を覆う整地土から大量の土器が出土した。土壌群の上を覆う整地土及びその周辺に広がる包含層には多量の土器が含まれる。大半が奈良時代の土器で、先に記述した土壌等の遺構から出土したものと接合するものもあり、本来はそのような遺構に属していたものが後に上部の攪乱等によって移動した結果と考えられる。ここではそれらの土器を一括して扱うこととした。

大量の須恵器と少量の土師器がある。土師器は皿Aなど小破片のみで図示しうるものが少ない。須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・皿B蓋・杯F・杯F蓋・高杯・壺A・壺A蓋・壺E・壺K・甕・水瓶等の器種がある。

金粉付着土器：須恵器杯B蓋の内面に金粉が付着したものがある。金粉は器内面のほぼ全体にみられ、特に器面の随所にある窪みにはよく遺存している。蛍光X線分析によれば金とともに不

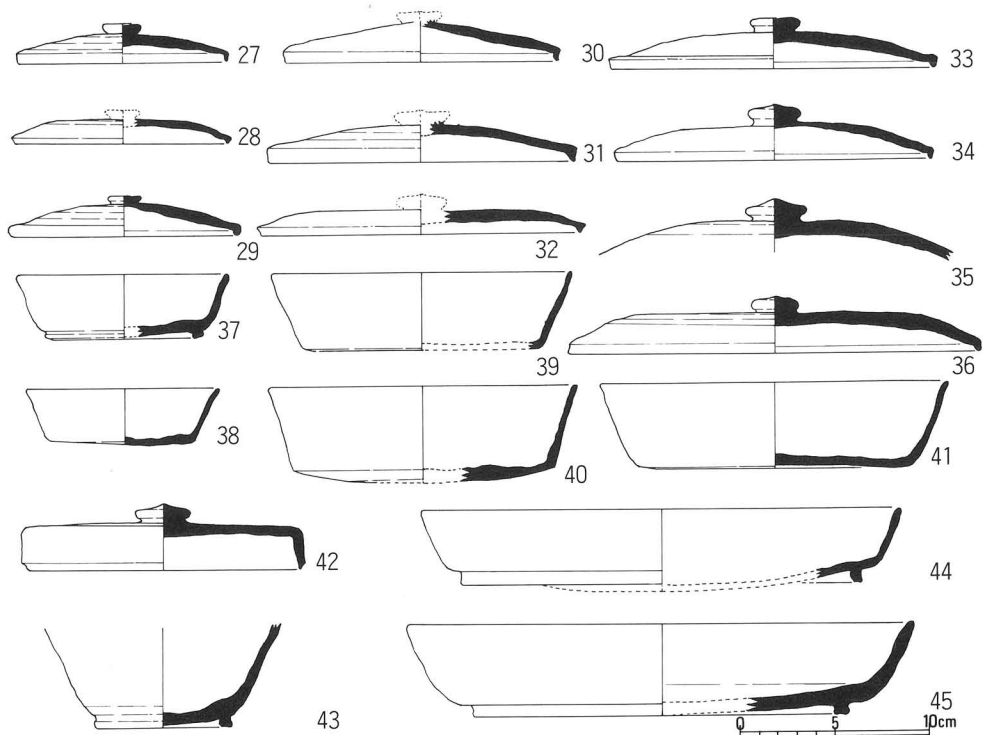


図18 SK2596出土土器

純物として微量の銀が検出されている。おそらく金泥としてもちいたものとかんがえられる。器内面はつるつるに磨滅しており、頂部外面は火ぶくれによってところどころが盛上っており、窯内での降灰による無数の小穴があいている。その口径は17.2cmである。整地土から出土している。8世紀前半に属すると思われる。

陶硯：整地土から陶硯が2点出土している。いずれも小型の円面硯で圈足部分を残すのみである。このほか須恵器の蓋や杯B高台部分を硯に転用したものが少数みられ、朱墨に用いたものもある。

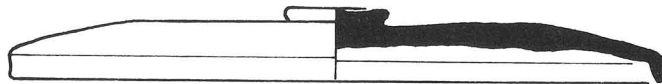


図19 金粉付着須恵器(1:2)

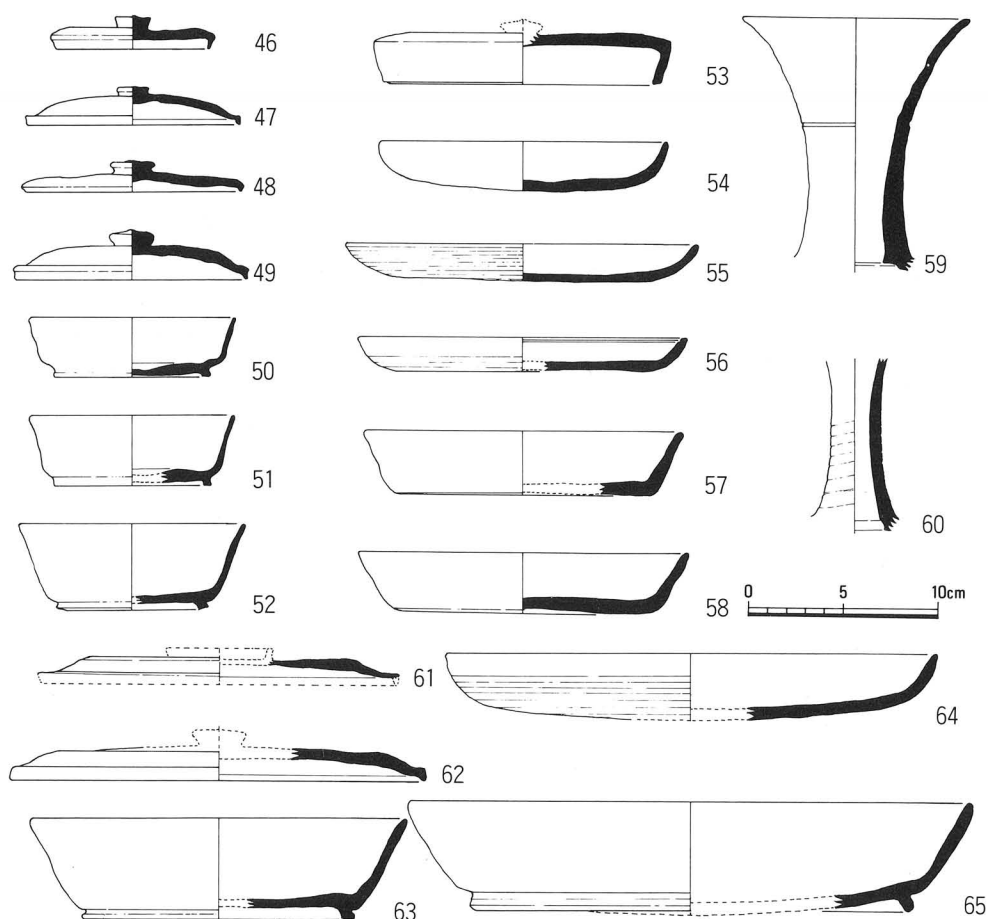


図20 整地層出土土器

ま と め

本調査区の土器を総体としてみると、平城宮土器Ⅱ～Ⅲ、すなわち8世紀前半から中頃にかけてのものが主体を占め、この地の最盛期を示している。土器の大部分を出土した土壌群は8世紀中頃に形成されたもので、B期の遺構にともなっていたものであろう。井戸の開削もそれとほぼ時を同じくしていると考えられ、大きな時間的隔りはないであろう。土壌群の形成と井戸の掘削は8世紀中頃におけるこの地区の利用状況の大きな変化と密接にかかわると思われる。

本調査区の土器について特徴的な点をあげると、第1に土器の種類では須恵器の量が圧倒的に多く、土師器が非常に少ないこと、第2に器種のうえからは杯・皿など食器類が大部分を占めること、第3は水瓶等の金属製仏花器の形態を模倣した土器、あるいは図16―17にかかげたような特

殊な形態をもつ土器の存在である。第4にはSK2596の項でも触れたように畿外で作られたと考えられる土器の存在があげられる。

第1の点はこれまでの京内遺跡の調査でも共通したありかたを示し、土師器の占める比率の高い宮内の土器との相違点としてあげられるところである。第2、第3の特色は本調査区の性格と密接にかかわると思われる。また第4の点に関して従来の京内遺跡の調査でも東海地方など遠隔地の土器の存在が指摘されている。

これらの点を総合すると、本遺跡における土器の様相は、左京一条三坊（註2）や左京四条四坊（註3）等の邸宅に関係する遺跡と共通する点が多い。土器からみても本調査区が高位の人物の住居に関わる遺跡であることは明らかである。これに加えて第3の特色、金粉を用いる作業が本遺跡で行われていた事を物語る金粉付着土器の存在は本遺跡の合わせ持つ特殊な性格の一端を示すのではないだろうか。それが何であったかは特定できないけれども、写経関係の施設をその候補の一つに挙げることができるのではないかと考えられる。

註1 土師器碗Eは今回設定した器種名である。碗Cに似るがそれとは区別される。その特徴を述べると、低平な丸底の底部で、口縁は直立ぎみで、口唇部は凹線をなすものが多い。口縁部外面のヨコナデは幅広い。底部は不調整のままで、ヘラケズリやヘラミガキを加えることはない。碗Eの良好な資料は、奈良市前川遺跡から多量に出土している。京内で一般的な土器と予測している。奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974 PL. 20-36・37、24-123・124-130など参照。

2 奈良国立文化財研究所『平城京左京一条三坊の調査』平城宮発掘調査報告Ⅵ 1974

3 奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983

平城宮土器の大別名称と略年代

大別名称	略年代
平城宮土器Ⅰ	A.D. 710
平城宮土器Ⅱ	725
平城宮土器Ⅲ	750
平城宮土器Ⅳ	765
平城宮土器Ⅴ	780

2. 瓦・埴

瓦埴類の出土量は他の京内遺跡に比べるとかなり多い。特に井戸SE2600からは大量の埴とともに瓦類の出土をみた。このほかはほとんどが整地土から出土したものである。

瓦類のうち多数を占めるのは丸瓦と平瓦で、ついで軒平瓦23点、軒丸瓦13点である。

記述にあたって、奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を用いる。

軒丸瓦（図21・22、写真17） 軒丸瓦は5型式5種に分類することができる。

6227型式は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区に二重圈線をめぐらす。外区外縁が素文であることの特徴とする。A・B・Dの3種が知られているが、本例は中房が弁区より一段高く、弁が整い弁端が丸いことからD種と判定できる。調整法は、瓦当裏面・顎が横位篋削り、丸瓦凸面が縦位篋削りである。焼成は不良で、外面が黒色を呈す。胎土に3～4mmの比較的大粒な石英を含む。土壙SK2597から1点、整地土から3点出土した。同范例は、平城宮のほか、平城京左京三条一坊十四坪、大和豊浦寺にある。平城宮軒瓦編年第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）であろう。軒平瓦6663Jと組み合わせる可能性が高い。

6282型式は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区に珠文と線鋸歯文をめぐらす。弁の輪郭線を凸線で表現するのが特徴である。A・B、D～I、Lの9種がある。本例は弁の盛り上りが強く、弁端が間弁に接するのでI種にあたる。I種は范の彫り直しがみられ、Ia種とIb種に細分されている。Ia種は各弁が独立して細いのに対し、Ib種は弁がとなりの弁や間弁に接するなど乱れが目立ち、しかも太い。本例はこのうちのIa種に属す。瓦当裏面にナデ、顎に横位篋削りが施されている。焼成は良好で、青灰色を呈す。井戸SE2600の埋土から1点出土した。平城宮大膳職地域や東院地区で多く出土し、平城宮軒瓦編年第Ⅲ期に編年されている。

6285型式は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区に珠文と線鋸歯文をめぐらす。中房が比較的小さく弁が長いのが特徴である。A・Bの2種に細分されている。本例は内区の盛り上りが強く、中房が弁区よりわずかに高いのでA種にあたる。瓦当裏面と顎は横位篋削り、丸瓦凸面は縦位篋削りである。焼成は良く、外面が暗灰色を呈す。土壙SK2591から1点出土した。大和歌姫西瓦窯の所産¹で、平城宮のほか、平城京左京一条三坊十五・十六坪、同三条二坊十四坪、同三条二坊六・十・十五坪、同九条三坊三坪、東三坊大路、山城恭仁宮、大和秋篠寺、唐招提寺に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期（養老5年～天平17年）に位置づけられている。

6308型式は複弁8弁蓮華文軒丸瓦で、外区に珠文と粗い線鋸歯文をめぐらす。中房が弁区より一段高く、間弁が弁の周囲をめぐらないA系統であることを特徴とする。A～D、H～Nの11種に細分されている。本例は中房の突出度がわずかで、弁端がそり上らないのでA種にあたる。表面の遺存状態が悪く、調整法はわからない。焼成は不良、外面が暗灰色²を呈す。整地土から1点出土した。同范例は平城宮のほか、平城京左京二条二坊十二坪、東三坊大路、西一坊大路、西隆寺、薬師寺にある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期に編年できる。

6348型式は複弁7弁蓮華文軒丸瓦で、外区に唐草文と線鋸歯文をめぐらす。A種だけが知られ

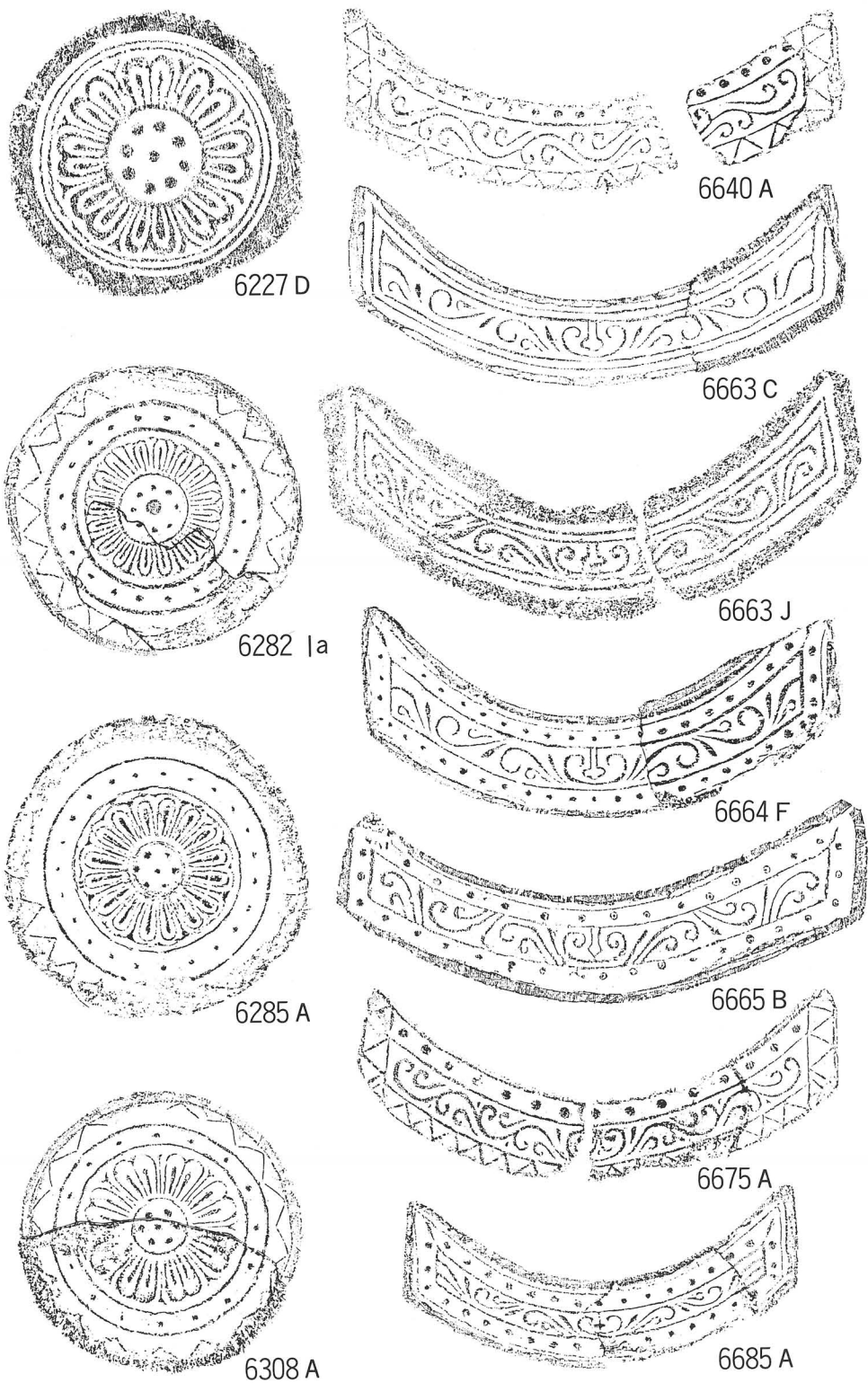


図21 軒丸瓦・軒平瓦(4分の1)

る。整地土から出土した1点は完形で、細かな観察が可能である。比較的大きい中房は高く突出し、蓮子は1+8。弁の盛上りは小さく弁端がややそり上る。間弁はA系統。外区内縁の唐草文は18単位で、反時計回りにめぐる。外縁の線鋸歯文は粗く、19単位ある。瓦当裏面は平坦で、全面にナデを施し、縁辺部に横位篋削りを加える。顎は部分的に横位篋削り。篋削りを施さない部分には范型痕が残り、幅約2mmの凸線状隆起がみられる。丸瓦凸面は縦位縄叩きを施してから、丸瓦部に縦位篋削り、玉縁部凸面と端面に横位ナデを追加する。なお玉縁部にも縦位縄叩きの痕跡をとどめる。凹面は瓦当ちかくに横位ナデを施すほかは、全面に布目を残す。側面は瓦当から玉縁部にむけて縦位篋削り、さらに凹面側に面取りを加える。焼成は良好で、淡灰色を呈す。胎土が特に精良である。全長380mm。ほかに溝SD2583から2点、整地土から2点出土した。平城宮における出土数はきわめてわずかなのに対し、平城京域で多数出土している。左京一条三坊十五・十六坪、同三条一坊十五坪、同三条二坊六坪、同四条二坊三坪、同五条三坊十三坪³、同八条三坊十・十五坪、東三坊大路、右京六条四坊七・十坪、西一坊坊間大路、法華寺、薬師寺、法隆寺東院に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期に位置づけられているが、内区文様が藤原宮式軒丸瓦6279型式に類似するので、平城宮軒瓦編年第Ⅰ期（和銅元年～養老5年）にさかのぼる可能性もある。当調査区の軒瓦出土比率から、軒平瓦6675Aと組み合わせる。この軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせは、従来あまり明確でなかった平城京内の邸宅などで使用された軒瓦の組み合わせの一つと考えられる。

軒平瓦（図21、写真17） 軒平瓦は6型式7種に分類することができる。

6640型式は内区右半に5単位の左偏行唐草文、右半に4単位の右偏行唐草文をあしらった変則的な偏行唐草文軒平瓦で、上外区に珠文、下外区・脇区に線鋸歯文をそなえる。A種のみが知られる。顎は段顎で斜位篋削り、平瓦凹面には模骨痕・布目を残し、瓦当ちかくを横位篋削り。側面は縦位篋削りで凹面側に面取りを残す。焼成は良好で、灰白色を呈す。井戸SE2600の埋土から1点出土した。平城宮のほか、平城京左京二条二坊十三坪、同五条一坊七坪、東三坊大路に同范

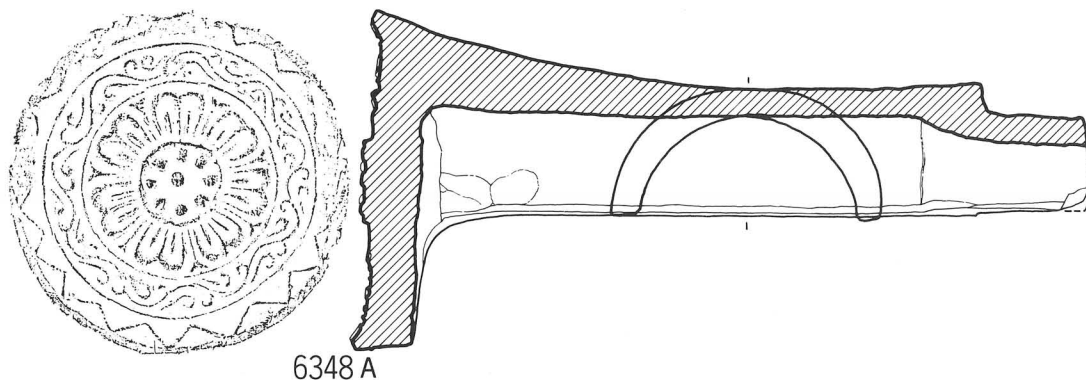


図22 軒丸瓦実測図(4分の1)

例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅰ期であろう。

6663型式は花頭形中心飾をそなえた3回反転均整唐草文軒平瓦で、外区に二重圈線をめぐらす。A～F、H～Mの12種に細分されており、そのうちC種とJ種が出土した。

6663C型式は唐草基部が界線に接しないこと、左半の第2単位第1支葉の巻き込み方が逆なこと、第3単位の主葉先端が脇区に接すること、右半の第3単位第1支葉を欠くことを特徴とする。顎は段顎。遺存状態が悪いため、調整法はわからない。焼成は不良で、淡黄色を呈す。整地土から1点出土した。平城宮第二次朝堂院地区で多く出土するほか、平城京左京二条二坊十二・十三坪、同三条二坊九坪、同五条二坊十四坪、同八条三坊十・十五坪、東三坊大路、秋篠寺、唐招提寺、法隆寺に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅲ期。

6663J型式は唐草が線太で、唐草基部が界線に接し、第3単位主葉・第1支葉が巻き込んで脇区に接しない。曲線顎で、平瓦凸面は縦位縄叩き後、瓦当ちかくを横位ナデ、凹面は瓦当ちかくを横位篋削り。側面は縦位篋削りを施してから、凹面側に面取りを加える。焼成は不良で、淡灰色ないし淡黄色を呈す。胎土に3～4mmの比較的大粒な石英を含む。井戸SE2600の埋土から1点、整地土から4点出土した。平城京左京二条五坊九・十六坪、同三条二坊六坪、薬師寺に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅲ期であろう。

6664型式は花頭形中心飾をもつ3回反転均整唐草文軒平瓦で、周囲に珠文帯をめぐらす。A～D、F～Pの15種に細分されている。本例は唐草が線太であることと、唐草文と珠文の位置関係からF種と判定できる。顎は段顎で、平瓦凸面にかけて横位ナデ、凹面ちかくは横位篋削り。側面に縦位ハケメを施す。井戸SE2600の埋土から1点出土した。平城宮内裏地区、内裏東外郭地区で多く出土する。平城京左京二条二坊十二～十四坪、同三条二坊七・十・十五坪、同八条三坊十・十五坪、右京二条二坊十六坪、九条大路、法華寺に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期である。

6665型式は花頭形中心飾をもつ3回反転均整唐草文軒平瓦で、周囲に珠文帯をめぐらす。左右の第3単位主葉先端が脇区に接しないのが特徴である。A・Bの2種に細分され、本例は花頭基部と唐草基部が界線に接するのでB種にあたる。顎は段顎で、縦位篋削り。平瓦凸面の顎ちかくと凹面の瓦当ちかくはともに横位篋削り。なお凹面で篋削りが及ばない部分に、模骨痕と布目が残る。側面は縦位篋削り。焼成は良好で、青灰色を呈す。整地土から1点出土した。平城宮のほか、薬師寺に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期であろう。

6675型は八字状の中央に珠文をそなえた形状の中心飾をもつ4回反転均整唐草文軒平瓦で、上外区に珠文、下外区・脇区に線鋸歯文を配す。唐草は連続し、第2～第4単位の第3支葉が小粒である。A種のみが知られる。顎は段顎で、縦位篋削りを施す。平瓦凸面は縦位縄叩きののち、顎ちかくを横位あるいは縦位に篋削りを加え、さらに横位ナデを追加する。凹面は瓦当ちかくを横位篋削りする。篋削りが及ばない部分には模骨痕・布目が残る。側面は縦位篋削り、凹面側に面取りを加える。焼成は良好で、淡灰色あるいは青灰色を呈す。胎土が特に精良である。掘立柱

建物SB2582の柱穴から1点、井戸SE2600の埋土から1点、溝SD2602から1点、整地土から8点
が出土した。平城宮での出土数はわずかで、平城京左京一条三坊十五・十六坪、同三条二坊六坪、
東三坊大路、北辺坊に同范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅰ期に位置づけられている。

6685型式は内区と上外区との界線から垂下した凸線の左右に珠文をそなえた形状の中心飾をも
つ3回反転均整唐草文軒平瓦で、周囲に珠文帯をめぐる。小型で、第3単位主葉・第1支葉が
脇区界線にとりつくことを特徴とする。A～Eの5種に細分されている。本例は珠文が大粒なの
で、A種にあたる。遺存状態が悪いので、調整法はわからない。焼成は不良で、淡灰色を呈す。
井戸SE2600の掘形から1点、整地土から2点出土した。歌姫西瓦窯産で、平城宮内裏地区で多
く出土する。このほか、平城京の左京三条二坊七坪、朱雀大路、北辺坊、西隆寺、唐招提寺に同
范例がある。平城宮軒瓦編年第Ⅱ期に編年されている。

丸・平瓦 丸瓦はすべて玉縁式である。凸面で叩きを観察できた資料は、すべて縦位縄叩きで
あった。このあとに、横位ナデを加える。玉縁部凸面の調整には横位ナデのほか、横位ハケメが
ある。凸線を1条そなえた例もある。側面は凹面側から分割截線を入れ、凸面側に破面を残した
ものが多い。端面には篋削りを施し、さらに横位ナデを追加した例もある。

平瓦の凸面はすべて縄叩きで、縦位のほかに横位の例もある。凹面には布目が残し、模骨痕を
とどめた例ととどめない例の両方がある。後者の多くは布端が側面ちかくにあるので1枚作りに
よって製作されたとみられる。側面には丁寧な縦位篋削りを施したものと凹面側に面取りを追加
したものがある。端面は横位篋削りで終了したものと、さらに横位ナデを加えたものがある。資
料はすべて細片のため、これらの違いについて相互の関係はわからない。

埴 長方形埴にかぎられている。完形品48点のほかに、破片が多数出土した。破片になった埴
の隅部をすべて数えると134点あり、完形品に復原すれば最少34点になる。すなわち、当調査区
では最も少なく見積っても82点という多量の埴を出土したことになる。長さ、幅、厚さのいずれ
も計測できる50点について大きさで分類すると、大型(31.6×14.6×7.2cm)が1点、中型(27.5
×20.0×6.3cm)が46点、小型(21.5×15.0×6.0cm)が3点であり、中型が92%を占める。調整
法はいずれも、上・下面がハケメ、側面・小口面がナデで、違いはみられない。井戸SE2600から
集中して出土し、井戸枠の下に完形品22点と破片8点を敷きならべていたほか、井戸掘形や埋土
からも多数出土した。埴SA2606・SA2608、土壙SK2595・SK2596および整地土から出土した。

注1 奈良県教育委員会『奈良山Ⅰ—平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報』1973年

2 奈良市教育委員会が発掘調査した。中井公氏に御教示いただいた。

3 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書一昭和57年度』1983年

3. 木製品・金属製品

木製品は、井戸SE2600の内部と掘形の両方から出土したが、その数は少ない。

井戸内出土の木製品 いわゆる方形曲物の蓋板と、有頭棒がある。方形曲物の蓋板(2)は、隅丸方形の隅角の破片である。柁目にとったヒノキ薄板の両面を削って調整し、片面の縁辺部を大きく面取りする。現存する材のほぼ中央の縁辺には二孔の小孔がある。側板を樺留めした綴じ穴であろう。現存部は長辺が17cm、短辺が9.3cm、厚さが0.5cmである。

有頭棒(12)は、スギの角棒を丸棒状に削り、一方の端部を内から端部に向けて削りこみ、頭部を作る。端部の木口には折りあとを残す。他端部は折損している。現存長30cm、最大径3cmである。この他、井戸内からは檜皮が若干出土した。

井戸掘形出土の木製品 井戸枠外側で、細棒15本が桢板に接するように出土した。これらは上下二段各八面の井戸桢のうち一箇所を除き、すべて桢板外側の各辺中央付近にあった。出土状況からみて、当初は桢板の各辺中央に挿し立てたのであろう。細棒は井戸桢の上段と下段で形や大きさに違いがある。下段からは8本(1・3～5)が出土した。このうち4本が接合し、1本が木理の状況からこれらと同一材と判断できる。不足があるが、これらはヒノキの板材の上端を圭頭状に、下端を水平に切り落とし、圭頭の両側辺の各一箇所に切り込みを加えた「串」の一種である。大きさは、長さが18.4cm、幅が6.5cm、厚さが1.9cmに復原できる。残る二本は別材をもってあてている。上段からは7本(6～11)が出土した。ヒノキの柁目材を小割りにしたもので、接合したのは3本(10～11)だが、他も木理の状況などから同一材と判断できる。これは、幅2.6cmの細長い材を18～21cm程度に折ったもので、長軸に直交する2条の切り目を入れて折っている。一部はさらに木口を割り裂いている。これらは井戸桢外側の各辺中央部に挿し立ててあったこと、下段に用いられた材が、頭部を圭頭状に削り、両側辺に切りこみを加えた一種の串を小割りにしたものであることから、祭祀的な意味をもつ遺物と考える。恐らく井戸桢設置にあたり、湧水と井戸桢の永遠であることを願う祭祀を行い、その折に用いた「串」を祭祀終了後に小割りにし、桢木外側の各辺に挿し立てたのであろう。奈良時代の井戸祭祀としては、井戸内部から出土した斎串などによって論及されているが、今回のような井戸設置時の例はない。類例の増加が望まれる。

金属製品 佐波理の椀(図24)が出土している。高台の付かない無台椀の口縁部破片で、復原口径は16.5cm、口縁端部内側をカマボコ形に肥厚させ、口唇部は平らに作る。口縁外面には2条一対の沈線をめぐらす。

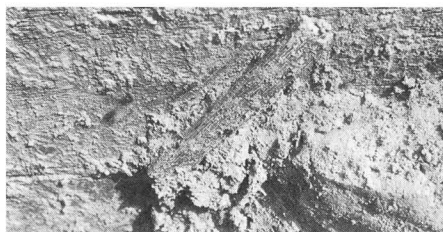


写真23 細棒出土の状況

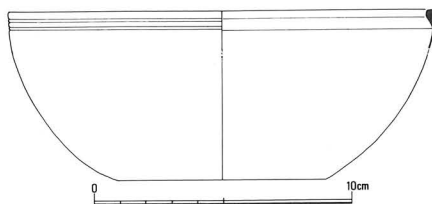


図24 佐波理椀実測図

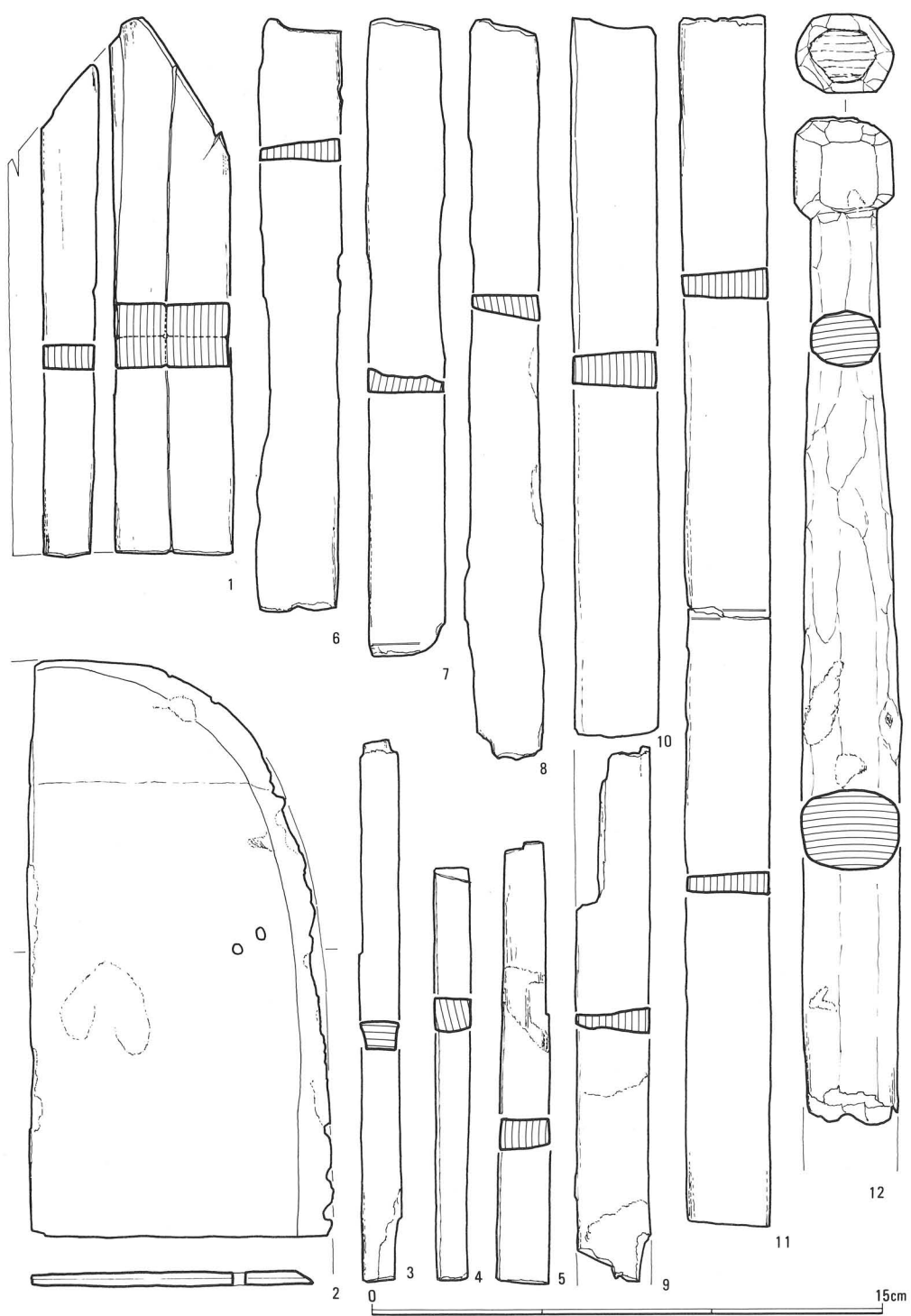


図25 木製品実測図